

講演 「息が聞こえる交わりこそが大切」
ウェストミンスター信仰告白第26章「聖徒の交わり」より、
神学的に交わりに基づく愛の業を考える

序 自己紹介

大宮教会牧師の辻幸宏です。大宮教会に赴任して5年が経ちました。その内の3年がコロナ禍ですが、東部中会の方々との交わりが非常に少なく、初めての方もおられるかと思えます。

中会・大会に出席されている先生方・長老などからすれば、特に最近は発言が増えていますので、接しにくく、あまり親しく交わることができない人間であると思われるかもしれません。そして、どこでも物怖じすることなく、発言すると思われることかと思えます。

しかし私は**内向型人間**であり、不特定多数の人たちの前に立つことは、非常に恐ろしく、できれば避けたい人間です。今日も逃げ出したいです。

内向型とは、心理学の用語になるかと思いますが、「外向型（社交的）」に対しての内向型です。内向型にも、様々な定義・幅もあるかと思えますし、専門的になりますので、これ以上深入りしません。今では簡単に調べることができますので、感心のある方は、調べていただければと思います。

長年、自分に自信を持ってない・コンプレックスをもった人間でした。学校において本読みをするにしても、緊張し、どもり、間違ふ。こうしたことが嫌でした。ましてや人前で、自分の意見を語るなどできませんでした。そのため、自分自身が内向型人間であることが分かり、楽に生きることができるようになったと思っています。

中会・大会に出席されている方（先生方）からすれば、積極的に発言し、誤り

などを指摘したりすることが多くなっているの、違った見方をされるかもしれませんが、ただ、発言するにあたっては、多くの場合、議案書において確認し、何を語るのかを準備し、それを繰り返し繰り返しシミュレーションを行って、勇気をもって発言しているのであり、できれば発言したくないのが事実です。

また、中会・大会での発言などは、人に対して厳しく指摘しているように思われ、誰に対しても厳しい言葉を語るように思われているかもしれません。しかしこれだけは理解していただきたいのですが、個人的に話しをする場合、人の失敗や罪を指摘することはほとんどありません。中会・大会での発言は、組織・委員会等を代表して行われていることに対して、本質・目的が見失ったことが行われたりすることに対して、意見を語ります。なぜならば、私たちは改革派教会を建て上げるために、会議を行い、委員会活動を行っています。本質・目的・秩序を見失ったとき、組織は乱れ、改革派教会を建てることはできません。

そして同時に、私自身、責任ある立場にあり、報告などを行うとき、まな板の鯉のごとく、指摘を受け、誤りを正されることを覚悟して、常に報告などを行っています。

ですから、大宮教会の中で、また個人的に話し合う場にあつて、個人の弱さ・罪は、聞きますが、そのことに対して、否定したり正したりすることはほとんどありません。繰り返し相談に来られる人に対しては、1時間なら1時間、30分なら30分と時間を区切りますが、そうでな

ければ、時間の許す限り話しを聞きます。そうすることにより、多くの場合、話しを聞くことにより、話している本人が、自らの弱さ・罪を理解しています。です

1. リモートを用いることの是非

さてようやく本題に入りますが、講演題を『息が聞こえる交わりこそが大切』ウェストミンスター信仰告白第26章『聖徒の交わり』より、神学的に交わりに基づく愛の業を考える」としました。ここは執事の皆さまの集まりですので、「愛のわざ」「執事活動」「ディアコニア」を理解し、また大切にしていきたいと思っています。

私は、3年間のコロナ禍にあり、教会における交わりが、非常に後退したように思っています。それは教会内での交わりにおいて言えることですが、それ以上に深刻なのが、中会・大会、そして教会間の交わりが希薄になっていることです。未知のコロナに対して恐れることは理解します。そのために教会において予防を行うことも当然です。しかし私たちは、何のために教会に来ているのか、何のために中会・大会における交わりを行うのか、教会間の交わりを行うのか、その本質・目的を考えずに、「コロナだから」という理由で、安易に中止にしたりリモートのしていることが多く、私はこうしたことに非常に危機を感じています。本質・目的を理解するならば、予防をしっかりと行った上で、多少の危険が伴っても、それ以上の益・恵みがあり、行うのです。

中会の教師会においても問題が生じています。中会の教師会は、相互研鑽（神学の学び）と共に、相互牧会という大きな目的があります。それぞれの教会の問題を、教師会において、あるいは個人間で共有し合います。普段は各個教会に分かれて教会形成を行っている牧師にとっ

から、聖書に基づく助言を行うことはありますが、それ以上のことを語ることはあまりありません。

て、相互牧会は非常に重要です。これは顔と顔を合わせて初めて行うことができます。しかし教師会は、昨年度までリモートを続け、私は反対したのですが2023年度も半分はリモートで行うことを決めました。相互研鑽はできても、相互牧会を捨てたとしか言えません。

確かにリモートは気軽に用いることができます。今まで物理的に距離があり、集会に参加できなかった方が参加できるようになりました。高齢者や健康上の理由で直接出席できない方が、集会に参加できるようになりました。

今までに互いに深い交わりが与えられ、気心が知れた人の間、つまり家族や旧友との間であれば、リモートでも意思疎通ができます。また委員会のように行事計画等を決めたり、仕事においても、リモートを用いることは有用です。

しかし、リモートでは話している人の感情を理解することはできません。今日の講演題を「息が聞こえる交わり」としましたが、リモートではこうした雰囲気を感じ取ることはできず、発言者の思いを肌身をもって理解することはできません。だからこそ、遠方の方もおられるかと思いますが、今日も、できる限りの方に大宮教会まで来ていただきたいのです。大宮教会に出席している方々に関しては、反応を見ることができます。また集会の後、交わりを持つことができます。しかし残念ながら、リモートで参加されている方々の思いを、受け止めることはできません。

2. コロナ禍にあつて「交わり」を考えた一年

さて「教会での交わり」と言えば、福音派の教会では積極的に行われていますが、改革派教会でも行われてきましたが、積極的に行ってきたとは言えないかと思えます。そして、「交わり」を神学することもなかったかと思えます。

しかし、今改めて「教会における交わり」を、聖書的に、神学的に理解し、教会の中で取り戻していただきたい、そのように思いで今年のテーマとしていただきました。私自身は、昨年2月、連合執事会の当番教会を受けざるを得なくなっ

てから、一年間、頭の中で考えてきました。それをまとめたものを、大宮教会の週報において掲載しました。それが、A5の冊子「コロナ禍における礼拝・交わりを神学的に顧みる」です。簡潔版は、次回6月のまじわり誌に掲載されることとなっています。今日はこのことに関して、直接的には触れませんので、各自で目を通していただければと思います。

また交わりの大切さは、11月に行われた教会教育研修会においても、発題者の一人として加えていただきましたので、その時に発題させていただきました。

3. 創造の秩序に見る「交わり」

こうしたことを思いつつ、改めて改革派信仰に基づく「交わり」について考えていくこととします。

最初に聖書の御言葉に聴きます。創世記1:26 **神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。」**

主なる神はご自身のことを「我々」と語られています。つまり、主なる神が人を創造されたとき、御父・御子・御霊の愛の交わりの内に、私たち人間を、神に似せて、おつくりくださいました。ここで大切なことは、私たち人間は、三位一体なる神の愛の交わりの中に加えられたこと、そして同時に、人間相互において、神と同じように愛の交わりを形成することを求めておられるということです。

創世記2:7 **主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。**

人はこうして生きる者となった。

人が生きるのは、息をすることであり、人と人との間で互いに生きるとは、息の

通う交わりを行うことです。リモートでは、息の通う交わりは行うことができません。

息の通う交わりを大切にするには、十字架の死から復活を遂げ、天に昇られようとされていた主イエスが語られた宣教命令にも言えるのではないのでしょうか。

マタイ28:19-20 **だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」**

主なる神は、聖霊の力により、人間の手を用いずに宣教することもできたはずですが、しかし主なる神は、人が宣教するように求めておられます。これは人と人との間の交わり、人格と人格の交わりをとおして福音を宣べ伝えることを求めておられるのです。

4. ウェストミンスター信仰規準を用いること

ウェストミンスター信仰規準（信仰告白・大教理問答・小教理問答）は、改革

派教会の教師・長老・執事においては、任職のときに、誓約していただいている

す。しかし、各教会で学ばれることは多くはないかと思えます。

ウェストミンスター信仰規準は難しい、不要であると思われる方もいるかと思えます。しかし、聖書の全体像を知らなければ、聖書を読み、説教において各論だけを聴いていても、信仰は成長しません。神学が行われていなければ、教会は時代に翻弄されます。コロナ禍にあって、まさに教会は、神学的な議論を行わないまま、教会閉鎖やオンライン礼拝を行ったため、この3年間で、教会の基礎体力は、非常に脆弱に陥ったのではないのでしょうか。

ヘブライ書では次のように語られています。ヘブライ5:12~14 「**実際、あなたがたは今ではもう教師となっているはずなのに、再びだれかに神の言葉の初歩を教えてもらわねばならず、また、固い食物の代わりに、乳を必要とする始末だからです。乳を飲んでいる者はだれでも、幼子ですから、義の言葉を理解できません。固い食物は、善悪を見分ける感覚を経験によって訓練された、一人前の大人**

のためのものです」。

この固い食物として神学・ウェストミンスター信仰規準を持つことが求められます。

そしてウェストミンスター信仰規準を理解しようとするとき、これはハイデルベルクや他の信仰告白にも同様のことが言えるかと思えますが、誰に対する弁証・信仰告白の性質を知ることにより、告白されていることを理解することができます。ウェストミンスター信仰規準においては、下記のとおりに分けることができるかと思えます。

- ・キリスト教信仰の告白
 - 対異教・対異端（偶像崇拜の禁止、三位一体、二性一人格）
- ・プロテスタント信仰
 - 対ローマ・カトリック教会
- ・改革派信仰
 - 対アナ・バプテスト、対プロテスタント他教派
- ・ピューリタンの信仰
 - 12「子とすること」、
 - 18「恵みと救いの確信」など

5. 教会論における「交わり」の位置づけ

そして今日は、ウェストミンスター信仰告白より、「交わり」について考えることとします。

ウェストミンスター信仰告白は、1643-49年、イングランドにおける国教会の信仰告白として作成されました。全体で33章ありますが、その中に「第26章 聖徒の交わりについて」の章が設けられています。

まず、この位置づけを確認することが大切です。

- 第25章 教会について
- 第26章 聖徒の交わりについて
- 第27章 聖礼典について
- 第28章 洗礼について
- 第29章 主の晩餐について
- 第30章 教会譴責について
- 第31章 教会会議について

これが教会論の中にあります。ここでは「御言葉・説教」、「祈祷」に関しては語られていません。大教理・小教理問答で詳しく語られています。説教・礼典・祈祷が、礼拝における重要な要素であることは、ご理解いただいているかと思えます。しかし、ウェストミンスター信仰告白は、ここに「聖徒の交わり」を加えます。

その根拠となることが、使徒言行録2:42に語られています。聖霊降臨の時に、ペトロが説教を語った時のことです。

使徒2:42 **彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。**

ここに御言葉の説教・相互の交わり・主の晩餐・祈祷が語られています。改革派教会は、礼拝（御言葉・主の晩餐・祈

禱)を重視しますが、残念ながら、の相互の交わりを、見落とし、重視してこなかったのではないかと思います。

また、改めてウェストミンスター信仰告白を見てみると、この流れは、神の国における交わりを意識して語られていることに気が付きました。御言葉や祈禱と、地上の教会で行うものが、神の国では重要ではなくなり、むしろ、神と神の民と

の交わりが大切であることが、第25章「教会」で目に見えない神の国の教会と目に見える地上の教会について語り、続けて、聖徒の交わり、神の国につながる洗礼とその交わりを地上において確認する主の晩餐、そして鍵の権能を行使する譴責(戒規)、教会会議と、告白され、最後に第32章・第33章で終末論・神の国について告白されます。

6. ウェストミンスター信仰告白第26章「聖徒の交わり」

そして、今日は、ウェストミンスター信仰告白第26章に記されている「聖徒の交わりについて」を確認して行くことにします。

ウェストミンスターの表題は「聖徒」となっています。使徒信条においても「我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり」と告白します。

カトリックでは「諸聖人」や「聖母」との交わりと理解します。しかしウェストミンスターにおいて「聖徒」と語るのとは、カトリック的な使い方とは異なりま

す。
つまりウェストミンスターにおいて「聖徒」と語るのとは、信徒・クリスチャンと理解すれば良いかと思います。ウェストミンスター信仰告白第25章「教会について」で、「目に見えない教会・目に見える教会」という表現が用いられています。つまり目に見えない教会に、神の予定に入れられているすべての神の民が属します。これが聖徒ですが、聖徒によって目に見える教会を形成するわけで、地上に教会においては、クリスチャン・教会員のことを「聖徒」と語っています。

(1) 第26章 第1節(1) キリストとの交わり

では、実際にウェストミンスター信仰告白ではどのように告白しているのか、最初に第一節から確認します(松谷好明訳改訂版使用)。

1. 自分たちの頭であるイエス・キリストに、かれの霊により、信仰によって、結ばれているすべての聖徒たちは、イエス・キリストの、恵みの賜物・苦難・死・復活・栄光において、かれとの交流をもつ。

第1節で、聖徒は、神の御子イエス・キリストと交流し、聖徒同士の交流を持つという二部の分かれています。第一段落の核は「すべての聖徒たちは、イエス・キリストとの交流をもつ」ことです。その方法は「かれの霊により」つまり聖霊によって、また「信仰によって」です。外的召命・内的召命と言い換えても良いでしょう。

そしてこの交わりは、キリストの「恵

みの賜物・苦難・死・復活・栄光において」行われます。礼拝における御言葉の説教・主の晩餐の礼典・祈禱において行われます。礼拝においてキリストの臨在に与るといふ言い方がされるかと思えます。

リモートにおいては、説教を聞くことができ、説教を理解することはできるかと思えます。しかし、聖霊をとおしてのキリストの臨在に与ることはできません

ん。そのため、コロナ禍にあってリモートにおける主の晩餐は禁止されています。

聖書においてキリストが人を救われることが繰り返し語られます。このとき、キリストはその人を知っておられます。ルカ福音書19章では、徴税人ザアカイの名を知っており、19:5「**ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい**」とお語りになります。そして彼が罪の悔い改めに導かれた上で、ザアカイの家の泊まられます。

ヨハネ4章においてサマリアの女と出会ったとき、主イエスは彼女の素性をすべて知っていました。4:17-18「**イエスは言われた。『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。』**」

ヨハネ5章では、ベトザタの池で、38年病気で苦しんでいる人を見かけ、5:8「**起き上がりなさい。床を担いで歩きな**

さい」とお語りくださいました。

主なる神、御子イエス・キリストは、私たちのすべてを知っておられます。罪も弱さも含めて、私たちは何も隠すことができません。神は私たちのすべてを知った上で、キリストの十字架により、罪を赦し、神の子とし、そして神との交わりを回復してくださいました。キリストとの交わりを行うとき、もちろん礼拝において臨在のキリストと出会うのですが、キリストが私という人間のすべてを知ってくださっているように、私がキリストを知ることが求められます。このとき、愛ある豊かな交わりを行うことができます。私たちが御言葉によりキリストを知ろうとしなければ、キリストとの交わり、神の交わりが豊かになるはずがありません。

つまり、聖徒の交わり（横の交わり）は、キリストとの交わり（縦の交わり）があること、キリストとの交わりが深められていくことが前提となります。そして第一節の後半部分につながります。

(2) 第26章 第1節(2) 聖徒間の交わり

また、聖徒たちは、愛において互いに結ばれているので、互いの〔一般的な〕賜物と恵みの賜物にあずかる交わりをもっており、内なる人においても外なる人においても〔内的にも外的にも〕相互の益となるような、公的、私的な義務を果たさなければならない。

「聖徒たちは、愛において互いに結ばれている」。それぞれがキリストとの愛の交わりがあるからこそ、神の愛に根ざす互いの愛が求められます。「愛の交わり」ですから、キリストが私たちのすべてを知っておられ、私たちがキリストを知ることが求められたように、私たちが聖徒の交わりを行うにあたって、相手を知ることが大切になってきます。

最初に自己紹介を行いました。私という人間を知っていただきたく、そして聖徒の交わりを行いたいとの願いで、語りました。目の前の人を知るからこそ、

何を求めているかを知ることができ、自分が何を行うことができるかがわかるのです。

こうした聖徒の交わりを行うためには、息の通う交わりを行い、互いに知ることがなければ成立しません。教会員相互の聖徒の交わり、そして新たな一人の魂を救うためには、まさに時間を割き、体を動かし、お金を用いることも惜しまず行うことが求められています。

そして「〔一般的な〕賜物と恵みの賜物にあずかる交わりを行い」ます。牧師

ならば牧会になり、皆さまは執事であり「愛の業」となりますが、「内的にも、外的にも」です。心の問題・相談という

内的なこともあれば、施し・介助・補助など実質的な外的援助を行うことも求められます。

(3) 第26章 第2節 個々の教会における聖徒の交わり

2. 信仰を公に告白している聖徒たちは、〔第一に〕神礼拝において、また〔第二に〕相互を建て上げるのに役立つ他のさまざまな霊的奉仕を行うことにおいて、さらに〔第三に〕外的な〔物質的・物理的な〕事柄に関しても、それぞれの能力と必要に応じて、互いに助け合うことにおいて、清い交流と交わりを保たなければならない。この交わりは、神が機会を提供してくださるままに、いたる所で、主イエスの名を呼んでいる、すべての人々に広げられるべきである。

つづけて第二節に移ります。聖徒の交わりは、神礼拝が行われることが第一となります。すでに確認してきたように、神との関係・交わりが行われることにより、横の繋がり・聖徒の交わりが行われます。このことは主の晩餐で、より明らかになります。

続けて「〔第二に〕相互を建て上げるのに役立つ他のさまざまな霊的奉仕を行うことにおいて」とあります。励まし合うこと、教え合うこと、論し合うこと、祈ること、慰めること、訪問すること等を挙げることができ、まさに牧会そのものです。

そして「〔第三に〕外的な〔物質的・物理的な〕事柄に関しても、…互いに助け合うこと」です。教会内外において行われます。被災地支援、病院・福祉施設、子ども食堂、物資の支援……、執事的働き、ディアコニアの中心に位置することです。

こうした働きにおいて注意しなければ

ならないのは、上から目線で行うことです。持っている者が、持っていない者を支援するのですが、すべては主がお与えくださった賜物であることを忘れてはなりません。だからこそ信仰告白は、「清い交流と交わりを保たなければならない」と告白します。

そして最後の部分「この交わりは、神が機会を提供してくださるままに、いたる所で、主イエスの名を呼んでいる、すべての人々に広げられるべきである」。執事的働き、愛の業は、教会内に留まるわけではありません。教会の外の人たち、ノンクリスチャン、さらには世界規模の広がりを持つべきです。一教会でできることは限られます。しかし、覚えること、忘れないこと、祈ることはできます。

ウェストミンスター信仰告白第26章は、第3節もありますが、今日は取り上げないこととします。

7. 今の教会における聖徒の交わりの回復に向けて

連合執事会を始め、連合婦人会、埼玉地区連合婦人会は、当番教会制ですが、次年度当番教会が見つからず、困っています。当番教会をやりやすくする方法を考えれば良いとって思いの人がいるかと思いますが、それでは根本的な解決にはなりません。もちろん方法論としては

必要でしょうが、そもそもなぜ連合執事会を行い、例会を行っているのか、という目的を確認し、共有しなければなりません。

これは執事活動委員会に留まらず、改革派教会全体の問題ですが、中会主義を取っていると言いながら、実質的には各

個教会主義になっているのではないでしょう。中会の交わりがあると言うのは、教師会の時に少し語りましたが、相互牧会、つまり各々の教会の問題があれば、話し合うこと、助け合うこと、賜物がある教師・信徒が来て手助けをすることができることにあるのではないのでしょうか。しかし今の改革派教会では、こうしたことがほとんど行われていません。

無牧になった時に、代理牧師・代理宣教師をお願いするだけで、あくまで自分たちの問題で終わってしまいます。これでは、小さな群れがいっぱいあるだけで、力は削がれます。そうではなく、互いに小さな弱い教会であっても、集まり、互いに交わりを持ち、助け合うことにより、強い教会を形成することができるのだと思います。

東部中会で発表した75周年宣言においても、「地区の交わりを」ということが語られていますが、実際に活動することにより、教会は変わるのではないのでしょうか。

「高齢化だ」、「礼拝出席者が減っている」、「経済的に苦しい」と言った声が出てきていますが、ただ言うだけではなく、集まり、互いの問題点を話し合い、そして協力できることを行っていくことが求められています。

今日は、教会における交わりについて考えてきましたが、最後に「戒規」について話したいと思います。最初に使徒言行録2:42の御言葉を確認しました。

使徒2:42 **彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。**

このことから、「御言葉・交わり・礼典・祈り」の4つが大切であることを確認してきました。しかし似たことなのですが、宗教改革では、教会のしるしが語られます。①御言葉の解き明かし

②洗礼と主の晩餐の二礼典

③戒規（訓練）

これらが真の教会のしるしであると語られます（ベルギー信条、スコットランド信条）。

改革派教会は、ウェストミンスター信仰規準、そして教会規定を憲法として持ち、教会形成を行っています。罪が赦された人間が形成する教会であり、どうしてもこれらの本質・目的を忘れたとき、規定から離れてしまいます。私が最初に、中会・大会において発言していることを語りましたが、私が発言していることは、基本的に、こうしたことを指摘しているのです。

本質が忘れられていくとき、そのことを指摘することこそが、改革派教会を建て上げることです。主の御前に真の悔い改めが行われ、遜りをもって教会に仕えていくことが求められます。これを行うためには、聖徒の交わり、愛の交わりを深めていくしかありません。交わりが希薄になるとき、誤りがあっても、正されることなく、現状追認が行われていきます。こうしたことが重なることにより、教会は腐敗し、崩壊していくのではないのでしょうか。

真の意味で、教会における交わりを、教会全体で考え、回復への歩みを行っていかなければ、改革派教会の明日は見えてきません。

（終わり）